

# さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙  
1面・みんなの教理入門(2)  
2面・幸せを届ける言葉  
3面・新連載・おさしづの点滴  
4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 Tel.072-365-2571

E-mail : wat@sachihiro.com url : http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

## 教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
  - 夕づとめ…毎夕・7時00分
  - 春季大祭…1月21日午後1時30分
  - 秋季大祭…10月21日午後1時30分
  - 月次祭…毎月21日 午後1時30分
  - 春・秋季霊祭…  
3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の🌸マーク。市立公民館の裏・西側です。



### ■本部大祭の意義は…

天理教では、月々につとめられる月次祭がありますが、春秋の二回は大祭としてつとめられます。教会の祭典としては、上の欄に記している通りですが、これは春・秋という季節によるものではなく、天理教の教祖(おやさま)のライフヒストリーと密接な関係があります。すなわち、秋季大祭は、教祖が月日の社(神の住居)にお定まりになった日、天保9年10月26日を記念してつとめられます。天理教立教の日です。その年、その月日に天理教がはじまったのです。それを記念する祭典ということになります。一方、春の大祭は、教祖(おやさま)がその現身を隠(死去)された明治20年陰暦正月26日を記念してつとめる祭典です。本部ではその上からこの日はおやさまが身を隠された時間(午後2時)に祭典が終わるようにおつとめが執行されます。

### ■天理時報の手配り

昨年十一月より、当・阪南支部でも、天理時報の手配りが始まっています。当支部では、大きな問題もなく、順調に動き出しています。

### 《編集後記》

▼年度末を迎えて、何かと忙しい。わが家にも高校を受験するのが一人います。来月の発表まで落ち着かない日が続きます。▼巻頭の記事は、芹澤茂・天理大学名誉教授の「みんなの教理入門」、二回目になります。この内容に関心を寄せていました。あらためて読み直しています。▼先月29日、31日の二日間、新任の民生委員児童委員のための研修会が、大阪・森ノ宮の青少年会館でありました。去年12月にこれを委嘱された私もこれに参加しました。▼その詳細やその他の話題も、ブログで、毎度勝手気ままな話を載せております。そちらもご覧ください。☺  
p://sachihiro.com 「#やまさんのブログ」から入れます。

### さちひろ 第23号

編集兼発行人・山口 渡  
平成20年2月8日  
大阪狭山市今熊1丁目1133番地  
Tel. 072-365-2571



お道(天理教)を信仰する上に大事なことは、親神(おやがみ様)をいつも心に念ずることであるが、それと共に、親神のお話に耳を傾けて親神の心がわかるよう努力することである。親神はおやさまを通してお話し下されたので、おやさまより教えられたことをよく知り、これを固く信じていくことである。

おやさまより教えられたことは、人をみて法を説くような、その時々のことや特定の信者へのお諭し(教訓)などだけではない。だれにでもわかるような教理として、ていねいに教えられているので、聞きたいという心を起こしさえすれば、だれにでも理解できる。

しかし、親神の心を知るために、この教理を聞きわけようという努力は、必ずしも、すべての人がしているわけではない。教理の必要性が感じられない場合もある。

教理そのものによって動いている、或(ある)いは成り立っている世界の中にどっぷりとつかっ

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく説明します

## 「みんなの教理入門」連載・2 信仰と教理

天理大学名誉教授・芹澤 茂

ているような場合には、これが教理である」と言わなくても、おのずから教理を会得し、親神の心がわかる。そういう生活もありうる。

教理を学ばずに教理がわかるといっても、非常に大事なことであり、これは否定できない。

しかし、それは特別な場合で、普通の場合には、教理を明確に理解しておいて、「これが教理である」と、はっきり言えないと困る。教理を理解していれば、お道もよくわかるし、さきの方へ進んでも行ける。

信仰は教理を理解するところから始まる、と云える。

教理には、言葉によって表現されているものも、言葉によらないものもある。言葉によらない教理は、実際に、身をもって習いおぼえる必要がある。おつとめの仕方などは、言葉だけではうまくいかない。

言葉によって表現された教理には、必ず、芯

(しん)になる言葉(「文」とか「命題」と言われる)がある。例えば「かしもの・かりもの」または「人間のからだは、親神が人間に貸しているもの、人間が親神から借りているものである」という言葉である。芯になる言葉について、この言葉はどんな意味であるのか、この言葉によって親神は人間に何を伝えようとしているのか、人間に何を望んでいるのか、といった様々な事柄が問題になる。

このような様々な問題に答えられるようになれば、その教理がわかったということになるので、そのためにこの芯になる言葉に、だれにでも理解できるように説明が必ずついている。この説明によって、この言葉が表現している真理を理解するのである。

もちろん、真理を伝えられる方の立場とすれば、その真理を真理として実感することが大事なので、実感できるようにすれば、この真理をもって様々な問題に答えられる。それが教理を本当にわかったことであるが、をれには、

理解した真理を心から固く信じていくことが大切なので、信じていけばわかってくる。

この芯になる言葉は不変の真理を表現したもので、どんな外国語に翻訳きれても、をの表現はほとんど変わらな

い。しかし、その言葉につけられた説明は、時と場合で、どのようにでも変わ

りうる。変わつても、をの言葉が表現している真理を伝えるという点では、



違いはない。その時その場合にふさわしい道理に合った説明によって、真理がそのまま伝えられるならよいのである。教理を学ぶとは、この真理を理解し、わかっていくことである。

### 幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

(善本社刊)から

#### 感謝

朝、中学校の校門前を通ると、生徒が先生に手を合わせている。タイの挨拶は「合掌」だ。いつ見ても気持ちが良い。タイには六月に「先生に感謝する日」がある。先生に感謝し、先にとがった針みたいいな花と草を贈るのが習わしだ。「針のような鋭い頭脳を持ち、草のように逞しくなります」と、先生に固く誓う。地域、家族のきずな深い東南アジアでは、「師に感謝心」が、今もこのように立派に生きていると、知人が教えてくれた。思わず、何事も当たり前と受けとめて、感謝の心を失いつつある自分が恥ずかしい。

### おさしづの点滴 (2)

これから先という  
は、何を聞いても、  
どのよの事を見ても、  
も、皆楽しみよ  
り。楽しみや。よ  
う聞き分け。  
(20・2・24)

#### 【解説】

明治二十年正月二十六日(陽暦二月十八日)おやさまが現身を隠されました。そして、このおさしづの前日に御葬祭が執り行われています。百十五歳の定命を全うされるものと信じていた当時の人々にとってその衝撃は筆舌に尽くしがたいものでした。

### これからは楽しみばかり

この冒頭で「さあく、分からんく、何にも分からん。百十五才、九十才、これも分からん。二十五年不足、どうであろう。これも分からん。」と人々の思いが語られています。それ故に定命を二十五年縮めて、たすけを急ぐのです。

おやさまが「扉を開いて」世界をろくに踏みならしに出られて、自由自在に働かれるのですから、だれにも止めることはできません。すなわち、これからおやさまが御在世中に教えられた通りに働かれます。教えを聞き分けた者には、教え通りに働かれるのだから、どのようなことが見ても、何を聞いても「楽しみばかり」であると論じられます。

あすからどんな事をばみたとても  
なにをきいてもたのしみばかり

十四号 42

そのような状況で、おやさまが存命で働かれていることを伝えて、人々を勇気づけられたお言葉がこれです。そ

の働きは、今も変わることはありません。

#### 【おさしづ全文】

明治二十年二月二十四日(陰暦二月二日)午後七時

#### 御諭

さあく、分からんく、何にも分からん。百十五才、九十才、これも分からん。二十五年不足、どうであろう。これも分からん。どうしても、こうしても、すうきり分からん。故に二十五年を縮め、たすけを急ぎ、扉を開いて世界をろくに踏み均らしに出た。神のうてこの自由自在は出けようまい。止めるに止められまい。神は一寸も違わぬ事は言わん。よう聞き分けてくれ。これから先というは、何を聞いても、どのよの事を見ても、皆楽しみばかり。楽しみや。よう聞き分け。追々刻限話をする。